

孫からの手紙

渥美伊都子



9月11日の夜、アメリカで起きた同時多発テロの悲惨な映像をリアルタイムで見ながら、一体これからどのような世の中になるのだろうか不安に思いました。私はいくつかの国際交流のボランティア組織にかかわっているので、参加者の皆さんの安全をまず配慮しなければならないと思いましたが、それと同時に、このような状況だからこそ、このような活動をさらに発展させ、国際的な視野を持つ青少年を育成することがますます重要になると考えました。そのような時、アメリカ留学中の孫が、若々しいレポートを送ってくれたので紹介させていただきたいと思います。私の孫のえりこは学習院大学を卒業し、去年の9月から米国ポストン市郊外にあるブランダイズ大学大学院へ留学し「国際開発学」を専攻しています。

大学のキャンパスマップを片手に右も左もわからないままどり着いた大学の会議室のドアを開けると、そこには今まで自分の体験したことのない世界が待っていた。英語、フランス語、インド語、ネパール語、スペイン語、いろいろな言葉が飛び交っている。たださえ緊張していた私はこのインターナショナルな雰囲気にも圧倒され、しばらく放心状態にあった。さらに追い打ちをかけるように、全員を前にして自己紹介が始まる。ウガンダ政府の役人サム、マラウイーからきた牧師のアンダーソン、バナナ貿易をしていたセントルシアのチャールズ、パキスタンの経済大学教授ムハ

ンマド、ケニアのマサイ族出身のザック、ハワイからきた海洋学者のメリー・・・年齢もバックグラウンドも全く違う50人の生徒が「国際開発」を学ぶためにここポストンに集まってきた。学習院大学法学部を春に卒業して、そのまま進学した私はもちろんクラス最年少、国際開発に関しても初心者である。つたない英語で自己紹介を済ませて席に戻ると、全身から力が抜けてしまった。と同時に、自分がこの先2年間このプログラムでやっていけるかどうか、とても不安になった。そんな不安と緊張と期待が複雑に入り混じる中、大学生活の初日は過ぎていった。

私が開発学を学びたいと思ったのにはいくつかの理由がある。CISVという国際教育団体でのボランティアを通じて世界中の子どもたちの笑顔に触れ合う機会があったこと、その一方で東南アジアを旅して周ったときに、食べるものも住むところもないような貧困家庭の子どもたちの姿を目の当たりにして、大きなショックを受けたこと。日本人にとって、教育を受けること、衛生的な水を得ること、医者にかかること、十分な栄養を摂取することなどは、今や当たり前のこととなっている。ところが世界全体を見てみると、いかにこのような環境が特別なものであるかがわかる。国連や世界銀行をはじめ、各国機関が長年にわたり、援助を続けているにもかかわらず、貧困人口は増え続けている。なぜ貧困は削減されないのだろうか、グローバリゼーションは途上国にどう影響しているのだろうか、そしてこのようなとてつもない

く大きな問題に対して私は何ができるのだろうか、といった問いかけに応えてくれる学問、それが「開発学」だと思う。

比較的新しい学問分野である開発学は、経済、環境、政治、文化、ジェンダー、保健、教育、法律、ありとあらゆる要素を含み、何に重点をおくかは各大学のカリキュラムによって大きく異なってくる。私が所属する、米国ボストン市郊外にある Brandeis University, Heller Graduate School, Sustainable International Development Program (S I D) は、経済成長を指標に行われてきた今までの開発とは異なった視点からのアプローチに重点をおいている。具体的には、N G O (非政府組織) や原住民組織の役割に注目し、途上国側からの自主的な開発を支持するといった内容である。授業を受けてまず感じるのは、非常にユニークかつ実践的なコースだという点である。先に述べたように生徒の7割は、途上国からのフィールド経験豊かな学生たちであり、ディスカッションでの彼らの意見は、理論では説明されない現場の声を反映している。私は、本には書いていない貴重なデータを彼らから聞くことができた。たとえば教育問題。多くのN G O が識字教育のプログラムを実施しているが、現地の人にしてみれば、文字の読み書きは目的ではなく生活向上の手段にならなければならない。ところが識字教育を受けた人への受け皿が整備されていないケースが多く、彼らはせっかく受けた教育を生かすことなく、元の生活へ戻ってしまう。援助が本当に役立っているかというのを現場からの視点で考えることは非常に重要である。

アメリカに来て1ヶ月も経たない昨年9月、忘れられない出来事が起きた。ワールドトレードセンターへのテロ事件である。目の前のT V に写しだされた光景に目を疑った。これからどうなるのだろうと思うと頭が真っ白になり、正直とても怖かった。翌日、クラス全体でミーティングをすることになった。犠牲者へ黙祷を奉げた後、ひとり

ひとりが事件についての思いを語った。ルワンダのアネッタ、セネガルのハディバ、ケニアのザック、皆自分の国の内戦やテロで家族や友人を亡くしている。「今回のテロはとても悲しいけれど、世界には悲しい出来事がたくさんある。テロや内戦と隣り合わせに生きていかなければならない環境がいかに辛いか想像できる？ マスコミに取り上げられないけれども、途上国でのテロは日常茶飯事。たくさんの人が犠牲になっていることを忘れて欲しい。」静かに訴える彼らの目には涙があふれていた。そして全員で誓った、人々が恐怖と悲しみに怯えず暮らせる世界をつくるために私たちは今、開発学を学ぶのだと。あの時に参加者のあいだに流れた、決意とも覚悟とも呼べる連帯感の空気を私は一生忘れないだろう。

ボストンでの留学生活がはじまって、早くも8ヶ月が過ぎた。初日にはどうなるかと思ったクラスメートたちともすっかり仲良くなり、一緒に旅行したりパーティーしたりと、勉強に遊びに盛りだくさんの毎日を過ごしている。世界中から集まった留学生たちと共に暮らしていく中で、多くのことを学んだ。価値観や文化の違う人と向き合うこと、理解する努力をすること、そして自分自身と向き合うこと。海外留学生活とは、決して華やかなものでも楽しいだけのものでもない。しかしながら、私はS I D に来たことを後悔した日は一日もないし、ここでの経験が将来国際開発の仕事に携わって行く際に自分の大きな支えになることは間違いない。

先日、この夏から4ヶ月間、ブータンのU N I C E F でインターンシップを行うことが決定した。ますます留学生活が充実したものになる予感がするのは本人だけだろうか。